



開國起原

特
9 伊5
2110
6



2110
6



開國起原卷五

魯國使節永濟來中

評定不一度

林大學氏

海防 撰 江

何勢 子

大目 子

筒井肥前守川治左衛門尉等長崎に於て魯西
 亞使節に急接し上中論返極相論ひ答ふに將
 左第一に何故申論ひ申し何將不致及子切に
 以て必定浦質に相致す申左に以て當夏亞墨利加
 船渡來同抵此府内強擾ハ不及申急對御門彼
 二先を致され来一云々討論も至るに既二彼
 二氣を奪ひれり申ふ勿論當秋已て長崎浦船
 久敷の上抵度々返極をも彼是と申御二相致
 以致されハ中々容易二退帆も波り致必老中

長崎對面島根中幕にも必定と致ふ其甚二及
 以彼退帆と期も至るに御上陸度免至き
 以彼人にも余にも以て何故二致と益 市面威二
 拘り彼も益我候増長て御の支りりも益と海
 陸二路何れ二致も江戸に來り度皆申立居ふ
 事故若父と通致長崎及子切に以て陸路より江
 戸に江に何進立寄既等二致急接を遂ふに彼
 之意外二致て致より彼之氣を奪ひに致者之
 其上頼といふに以て氣を離れ申急接二以て
 其彼二七子之弱三致て致二七子之強三致て

道理は、何れ外容易に、皆明か場も、
 第一不義知、
 我々、
 吾々、
 公事、
 三、
 顔早、

但所蘭陀甲必丹、
 内見、
 正石、

海舟書屋

保元、
 是中、
 公事、
 丹、
 本、

魯西亞、
 以、
 以、

誠以上之定例一率六ヶ度、之勢も強計の、月
一向此方より先を制し、南秋中至る節も有る
此の陸地通の戸表は、此の前途に寺院杯に
役、之を對する、此の方集る類、此のより、此の
禮も砲も難、此の故、海外場、明、中、式、且、右、二、村
和蘭甲必丹、此の論、方、等、之、案、之、評、議、任、中、上
昔、此の書、取、之、以、此、作、同、事、以、其、意、此、寫、之、而、其、任
此、要、一、件、文、化、而、彼、國、レ、サ、ノ、ト、使、臣、と、一、七
存、載、此、砌、嚴、守、之、以、論、一、方、此、作、同、人、候、使、命
秘、立、之、相、嘆、之、降、臨、自、教、以、由、一、此、飯、如、御、之、教

二、而、此、其、以、來、更、之、強、題、之、有、教、其、中、此、以、
此、近、居、在、此、要、迫、來、西洋、諸、國、を、略、進、之、率、邦、に
仕、者、七、廿、此、を、見、同、及、此、舊、來、之、眼、重、達、一、所、に
相、企、此、意、意、然、而、此、同、地、式、百、年、來、之、本、來、上、下
臨、情、二、在、此、武、備、相、地、之、此、を、見、進、此、而、此、此、
其、諸、吏、同、相、之、此、二、而、右、之、要、合、之、進、此、此、教
相、生、一、此、根、元、二、之、有、之、能、而、之、彼、之、意、表、二、出
先、之、制、一、此、之、武、備、千、分、二、此、整、正、而、在、此、機、轉
親、士、年、曾、憚、二、相、成、此、相、此、要、意、有、之、此、外、有、之
其、後、即、其、余、之、計、策、之、類、而、枝、葉、二、滿、之、正、意、之

此子教のこゝに一寸功もなすべしと見切はる
 立ん方と雖も不詮高時に此の端業之士風は
 改正無う柳之に振振等と彼を先を制し腹
 を破らせしもの多し相叶ふと一方を此
 河沿を通るに板敷に相成るに農中の板待仁
 の姿に此の法を其長に切及の多し有るを
 定めし振順に帰帆に仁の法を後来に弊患此
 に振しに其限もなす彼に此謀に適高仁得意
 と其教多し方とある寛永以来後より先蹤を
 とり寛裕より板敷程より此子教を正し陸

地を以て通しに成る如し沙汰素より此
 成る多しと云ふハ勿論に此の法を畢竟武徳の
 為相成り愛を憐れむ愛より正金銀右等より
 計議にもつて及との勢既に此方十の弱に
 掩ひ顔き意味合相頭れに候を遠く文化度を
 以て比例仕るるも勝劣の多し方と云ふ故彼等
 能く見明らり又案知つて仁を必定に方と能
 るを使はる往還日度知りて月取中相残り
 公者は徒に長考表に滞留するに謂ふも其
 使はる外陸路江戸上さへ此免方と云ふ上

聊得与至之通海之相也。一甲之勿論或
正使一以之陸路を趨り副使一子之新之を
獲一海路を相也。一甲之勿論或
量之自後之夢中必起也。細計左以之浦賀
内海無俾以警備其外以子教之義之更之免也
細く外國之臣の二内地十分踞荒之れ測量等
通也時宜之。分仕以之丈之弱之。相成之弱之
以取教之。多可之。以子教之。必為熟以之。却
之遺患不也。一甲之。譬へ尋常陸路系上仕
以之。也。路次送迎之。煩冗休泊之。警備等。久費矣。

大之。一甲之。度且一旦右振之。以例相用
上之。年之。東。仕。也。も。細計。願分。理由。之。諸。度
徒。疲弊。仕。怨言。蜂起。之。根元。之。在。成。進。之。其他
之。國。之。之。終。而。も。右。振。合。を。以。同。振。之。筋。中。幕。と
も。第。四。皆。く。江。府。系。上。為。仕。以。之。也。一。也。而。り。中。島
委。其。期。之。也。り。以。委。委。振。以。度。支。之。也。出。建。以。子
健。れ。之。端。之。一。相。成。之。眼。筋。之。也。一。身。種。之。勘。考
仕。以。委。彼。國。再。潛。以。取。振。之。也。ハ。先。達。而。中。上
並。以。通。彼。地。相。成。之。寺。院。等。一。也。意。對。之。上。以。何
相。相。論。一。也。也。東。振。不。仕。以。之。何。方。藏。及。一。也。

此據りて花一時も早く思作るに或は此振作
るに工支件要る事と存心公私一統評議仕
以て教書面より通に在るに則ち書取て以て勅定を以て
相見此後中上以上

十二月

大目付

五目付

嘉永六丑年十二月廿四日 對話筆記

肥後

一昨日江戸出の書面和譯 別代魯西並六日相成
十八日

海舟書屋

居る日本政府重内政人極方と有 出来波し
之の書面四十条に及ぶ事と有

一月一統憲法を以て其義を中因の通今以

て返答するに文意了解し衆の事と相見へり

此は返答する全文を讀みけり、不能有古例律

今時と有るに一句の音韻も相ふり、中且元

と其の返答書中と有るに、此類を括て巨細は

中因のより外新規のを合不相成候ハ勿論當

今の事柄も、其案案の要只管其元と有思返

此事の二昨日の通中因られ、其條り、其條の

掛合方と有存心

使表

一此稿中より漢蘭二ヶ通の文脈寫と詳見仕
て漢文と蘭文とハ少く意味相違の處有之
し然れども此を多分會得
仕仕ふ事故則昨日の仕掛合し及ふ處ニ有
ふ

肥前

一右板中同られども此は返書の全文を不殘會
得いさゝか時ハ昨日の書面等と差出る處
有る處ハ其方中主の額一處むの處ニ有

此返稿の表にも其處を略し作さる事ハ此
稿文意の面調とハ容易ありぬ其既ニ地所
の事ニ就てハ此稿中議論も少くハ通り双方
とも所為の處に齟齬いたし居一と通此地
て又談判にてより容易に面取交りて巨
細又面調ハ其ハ暫時は出来ず亦とも不
元々其ハ此返稿の仕掛合其元々不
りし處ハ處に能く説き明しハ板との命を更
まらば只此方為人又諸事改訂消異ハ板中
同ハハ何處に返稿ハ文意の面取違ハ固不有

その意を以て

一使臣より通詞を以て頼むハ此通詞文字失意

いふ事ありハる暫時の間洋儀は度々左様な射

儀知つてゐ

肥前

一使臣の身より有る無念無意ハ一列もよく

使令を遂ぐて其意を承く相察中ハ其小

り政府のハ誠意柄を替へて為通る此地ハ

ありハ事由ハ双方お解け懸淡海ハ度ハ勿論

ハハ先年元虎尹一宗の時境界の事彼是誤判

海舟書屋

も有る其後五十年其後にて互にお互ハを

當面ニおり候りハ一列を年ハ此ニ承中ハ

と誠心通ハ一俸使臣の職ニありハるを聊の

遅速ハ拘はら民國帝の誠意始終十分ニ相貫

きハ取面計ハ有る意にて有る事と為ハ

使臣

一俸より頼むハ此に在世上の振合五十年其

相替りハ其意を承く此意に別儀中互ハ

此意を承くハ其意に相替り一變いふ

往古ハ其意を承く其意に相替り一變いふ

通り日本邊海に外國之船に安渡同往還致し
 振居候に奉に付此御申之に港二ヶ所御此國
 此に御申之に船との急遽に振居候に御申之に
 乙ハ不都合之節に有之に文に付先般本國より
 先上公書翰中の意味逐々申上度御有之に
 一此長崎奉行に通牒に相持也一通詞に相渡
 也

左邊の尉より肥後より只今使臣申出に
 其ハ先づ其後同前より通牒に又云の議
 論に海の方で御有候に申通奉候振居を

見合せし奉

使臣

一三五年来延に御城府との御意に公に於て一
 別にも相延に文兼に兩國の御領事相持し
 申且通に兩國の御領事相持し
 下中と御念仕に

肥後

一子爵志の御意に公に何分當國の事情に於
 て是向相談御意相合も有之奉あり

左邊尉

一書翰の一句一章を互に議論を及んでハ惣
伴の筋合相立ち中る数中さハ使臣の肩と腰
のこを見え使臣とハ知悉不中踵より頂に
る近き見海へてろりて真の使臣たる事
相知さるゝ同様の譯に有る

使臣

一は返翰と致初より終り迄熟覽んべし此返
書中と相渡ぬ條こそはあ方極より此物語り
つ方々との分岐も此文章と表に相見へん
る要は書翰外に其は取扱不相成候此中國の

海舟書屋

而も此文意と相違いあるは誤りなる

九島附

一決り此返翰に致意と違ひ候と云ふは
へハ一十百子と有るを其小致を小致と
示ハ篤と中國の板との此所法を蒙り居候
等ニ有る此致致政より此致致の此返翰と
味と則將軍の思ふに有る能く上る右此文
面外に其小致と互極の事日本國中何國と
へありぬとも相あらぬ譯に此致を万一
作合ふに致意の外ニ新提館事と相渡り極

而も居下之職被相立乎不中是ハ就國而已
 云々万國とも皆去り何事へき事と云ふ
 一使臣より通詞迄中出れを暇日書面を以て立
 此由沙汰こそ不任為及只く不能と申二字を
 讀みける振に論有るに於て五十年前若く振
 二〇〇三五年相待の振との振振連中有り
 昌安為今之姿に相成る事故三五年と申由若
 有るに事と相心過は是迄を以て返翰此文意
 事而已此談も有りる事故右に振振而已仕居
 以得共是等之姿に自々品々に形仕居る有り

海舟書屋

以る由同趣に下る振消度其振中上異に振中
 同の返通詞申立に

大坂尉

一不能と申二字を若く後照應方爲之中國の才
 七一倍に振意振相あり兼る事故若く又論
 別ん爲る有りて五十年前と云ふ若く事振に振
 外相遠い多しに候に此方にも有りて是知
 事故に返翰に三五年の時月を相待の振に
 作せる事にも右に通來月相立たるを待てる
 上も如何に相成との始終を考へて申す

只今別に中世度有るとの要細兼り重ん
ねて論ん

使臣

一貴國之於二百年來外國之交りを以謝後有る
偏に特立之志を以て遂に以て二百年來之
内外國之を遂に軍事に及別巧者に在成
小貴國ハ品々の特立を昔と云故天下一
般に模範を以て兼知を以て自他に武備相欠々
其出来以て以て諸方之凌ぐに於て也
此等所有るに以て其内商港を以て貴國

海舟書屋

才一之由要害之地と兼り居るに於て商港連も
吃するに軍艦を居向ふに於て十分には禦
きに成る事と云是れと云るに云我國ハ歐
羅巴中にて於て他國と云ふに其間柄とも
一不中ハ附るハ其親交之上に万国に模範を
以て考へ合へ相成るに於て其に於て其
此隣國之由來を以て右等之次第に於て其
上との其政府より其に於て其に二々不
港を以て同きに成下るに於て其に急速に其
其方にて相考する

左の尉

一 此中主の条に在る篇は、同文の貴國の諸邦に
 卓絶たる事ハ、素々素々知いしに居る由に急述
 談判態度を考へ、此を吾輩此處を合三
 年を相待し、せよやうとの作を受け居然る
 故に返翰の意味は、觸る事ハ、何分相談態度
 中

引續

肥前

一 貴國と外國とに相違あり、其ハ只に我輩

海舟書屋

己心は居るが、其に在る既に政府は、此を素々
 事故は、我々が其の故に在り、又も同食は、
 たし、其は、其の故に在り、其の故に在り、
 接し、其の故に在り、其の故に在り、
 親戚は、其の故に在り、其の故に在り、
 は、其の故に在り、其の故に在り、
 おと、其の故に在り、其の故に在り、
 其の故に在り、其の故に在り、

使臣

一 此中主の条に在る篇は、同文の貴國の諸邦に

五

大福の厨

一書面紙、是出、其品ニ考、勅、余之上、此方、終、
也書面ニ、而、撰、招、仁、公、時、刻、相、成、公、昌、粗、末、
料理ニ、公、此、也、先、中、可、
支、度、以、
也

海舟書屋

使君

一此料理頂戴仕公後猶又中上度爲有之公与又
之此同通り之未預公此卷中横方之進上相仕
度候先達与中上並公一急以即ニ相成公此
之也何之公是上度之業与跡込居公与其後書
面を以猶又未預公右書面此落子之張下公

左衛門尉

一書面之爲ハ先の請取申

双方一先退后

健民

一 此料理天下無有仕合を致す

肥前

一 粗末の事なり

使臣

一 先き福無氣船より中上並に多量なり

續き尚山物諸品あり

左衛門尉

一 要細美なり

使臣

一 近年無氣船を後明より以來萬國の接板

海舟書屋

も大に折れり中々普通の小船より

風より甚だ地より浦賀湊迄三四日の日数相掛

りて中逆風にて八日は信より日数及ぬ

船にて其風の順逆は不拘是れ三四日の間

に長尾波をくみたり往古より留り世界

中何處へても近隣の如く誠は同進の事と相

成りぬ右に航海の御盛なり

湊に船掛り波も若く年月は相増す中絶る時

て是非石炭置所も数多あり

に有るは當時西洋諸洲にて

無氣船は小船

と同敷に打立直ぐ事：相成中、且又軍器等
も往昔より便利の品数多し、其内
後砲ハ邊に發明の製造方多し、有るは右等
の品にハ政府より給ふ由、商民に必用の品と事
毎に各民用の物も有る、其製造は、
此仕立くは右等の次序を以、商今の振合爲
と此質意有るは、此と事

左邊附

一、汽船の製造方、逐々相成、其品も兼及、兼は
多き、此は右等の品に、只今製造方相成、

政府へ賣出、一、此式不で、此の品ハ、其品
及

使長

一、是、此品、沙汰、此品、通外國、と、遂に、此品、厚
き、此品、板、有る、此品、其品、板、此品、此品、
是、此品、此品、板、此品、此品、此品、此品、
合果、板、有る、此品、此品、此品、此品、
一、中、此品、此品、此品、此品、此品、

左邊附

一、此品、事、此品、此品、此品、此品、此品、

要二つありて互に事々信義を以て経営し
 互に小利を相立公上を回向する者何れも拾別
 之を二部一とす誰れも若くは何れも者二は
 其れ其れにありんか如何に相立を以て
 此れ事々公上より互に相立の相立も相立中
 互にこれハ新近果敢公事ハ有る者其れも
 教念を捨て難談に改めん其れ上満足の事と
 此れ引續き肥後公事より中国公年月を
 相立連れん其れ則信義相立連れん事二つありん

使義

一魯西亜國終りて其隣誼連綿とす續きん事
 一之公心此の附と申す公交易之多諸君物
 之多寡精粗湊く運上金等速急速に取調相
 成る此れ其れ勿論之事二つありて此れ其れ
 信義打續きん其れ其れ二つありて二ヶ不々
 湊文も此れ其れ不々不々其れ其れ其れ其れ
 相立へん其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ
 寵を防ぎんた免免出免免守兵等時月相立連
 此れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ
 一相成る此れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

成記二身是亦春中二便界山而極成下山
方と存山

左邊附

一貴國之國と諸邦之風俗地理を研究し由一在
山事致別候中通も至之奉二山注及高年達也
最早餘日也至之唐太島工ト口ノ島等山也
山山由一未春中又至系山山二有之山山山
山熱考ノ山山山

使臣

一右島之山山山極方山誠一相候山二也及中局

海舟書屋

未定山山山隨漢之山山山一相成山山山相考一
中山山方之山山山山山山山山山山山山山山山山
二彼地通宛唐唐漢山山山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山
り山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山
二山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山
二山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山

左邊附

一中山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山
合山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山

園り中、山、川、海、逐一、を、中、分、に、而、感、心、に、外、に、
之、山、

使、臣、

一、右、等、之、家、山、執、政、方、に、山、中、立、に、相、成、公、之、定、而、
山、同、漸、相、成、公、之、考、に、中、公、

左、邊、の、耐、

一、其、元、在、中、立、公、通、相、成、公、に、以、て、故、合、宜、安、を、ハ、既、に、
美、知、波、后、公、に、以、て、先、日、其、船、に、自、分、在、打、連、屋、城、
に、在、り、地、に、而、事、以、に、之、山、同、法、に、終、而、難、相、
成、譯、合、方、に、公、杯、中、如、く、柳、之、事、に、而、も、俄、に、ハ、

海舟書屋

崩、し、う、き、顛、意、も、有、り、事、故、信、以、其、小、花、立、公、に、以、て、孫、
居、公、に、而、其、同、に、私、に、未、組、公、杯、中、其、志、執、政、達、に、中、出、
以、建、相、叶、公、に、不、以、私、交、張、陸、地、彼、返、波、一、系、昨、に、奏、同、
也、從、其、地、に、大、名、に、中、身、主、に、之、公、教、相、掛、不、中、公、に、而、之、
而、極、兼、公、事、情、故、其、小、甚、苦、心、に、孫、在、り、要、に、而、公、

使、臣、

一、國、境、之、家、山、是、延、引、相、成、公、に、以、て、山、同、漸、に、其、極、に、
山、公、教、之、事、に、而、相、生、し、一、中、に、只、今、より、案、知、に、
仕、公、

左、邊、の、耐、

一 文通之接板思意以多一以故若一也中国の通
 某に終るる飛立ち如く存ん故に何分と教を
 擲け不中ん而も發叶偏より之を成文々急遽
 有擲りん板を運にても何レとも取計りて不
 了其文通之間を二流板を異ん板波一なり通
 翰外之夢を臣下之身より有り一己之決断を以
 接抄板及事故此苦難を推察して改め

使長

一 此通翰より相見ん當茲より接板を尚今日候
 へ此中因之板に而も兼知ん仕ん也此重記此役

海舟書屋

之極態之此地通板相成只之通書之由意
 味合懇切に文作因ん而己に而も其板角由
 下向相成ん此改合板角がてハ表々會得難
 板仕と存ん

九通附

一 此通翰之意味聊に而も心有遠く康方より而
 も折角より思存も相貫き不中事に付是通
 へ中論ん夢に而も有る何分輕き改板之者存下
 へ而も大切より此板意相属する故其小を態に
 此地通板角下ん夢に而も有る也

二六

左邊の村

海舟書屋

一以返轉以文而二終而三何レ二也而留以爲
之爲重也三設之極以越相極以上二而巨細
之末也三直二而而極正極中三爲三葉而相心
得強在公事二公

九海の尉

一品ニ考取極意一么我もて有る即么故左指
文面ニ相待么極と有る么を爲と味へ是られ
么可略了解もて仕奉る么

侵

一 是迄度々之由論ニハ江左只々三五年を相待
ハ振との由沙汰而已ニ由テ使臣等何分目
知テ土地を相違スル儼然相成不中ハ先列由
嘲脚々中上ハ巨細之慮ニ認有書面ニ由具
廿ニ中上ハ振之仕ハ

肥前

一 三五年相待ハ振との夢を其元在然由テ只々
一時之期を延ハハ計策ニ難居ハ由テ由
ハ元々政府ニ於テ最初より由許容無ク後由
治定ニハ上ニ侍テハ振との由沙汰ニ由テ

海舟書屋

殊ニ此度之如ク支是之由而振向等無クモ勿
論ニハ右等之夢若後思合セハハ双方とも後
未相渡之相屈キハ振節毎之由波ハ

使臣

一 由沙汰之振ハ由ハ今日之由對話も先ッ
是迄ニ由並猶書面ニ相仕立差上ハ振之仕ハ
左邊尉

一 此後之對話ニ幾日ニ由波ハ由

使臣

一 昨日由家来中々ハ熱氣ハ由一覽ニ成度との

顔中因に成美知仕に、相成と車輪と動に
以換板を中目、掛々中層のる市茶板、
以成相成のり、大慶、孫の

昨廿三日左衛門尉より其他有南茶江川
太郎左衛門子、身無高取製造方、用相
心、湯居、一見、為、湯、度、との、一、同、ハ
相、渡、上、其、版、被、取、ハ、中、通、ハ、其、長、
以、徒、同、身、以、小、人、用、身、ハ、合、ハ、積、
方、ハ、ハ

左衛門尉

一、系、好、ハ、其、ハ、信、以、一、見、被、度、ハ、以、ハ、先、被、使、長、
取、ハ、系、ハ、ハ、括、別、ハ、被、何、ハ、容、易、ハ、孫、出、ハ、其、ハ、
細、相、成、事、故、先、ハ、相、断、中、ハ、

海舟書屋

使長

一、當、渡、ハ、被、酒、被、ハ、ハ、四、被、ハ、取、ハ、皆、私、ハ、指、揮、以、
身、ハ、相、成、ハ、事、故、何、也、ハ、使、長、の、被、ハ、ハ、以、被、ハ、
以、入、被、相、叶、被、ハ、ハ、ハ、被、被、被、ハ、ハ、被、被、中、の、被、
ハ、何、時、ハ、ハ、ハ、被、被、不、苦、ハ、

左衛門尉

一、心、入、の、候、ハ、系、被、ハ、被、被、被、被、被、被、被、被、被、被、
被、被、被、被、被、被、被、被、被、被、被、被、被、被、被、被、
由、ハ、月、尚、被、被、被、被、被、被、被、被、被、被、被、被、被、
く、ハ、若、又、ハ、立、た、き、被、被、被、被、被、被、被、被、被、被、

使臣

一日限り参ハ座ニ祈ル方より預出ル旨此度ニ
其由方極りて由取極先て此作圖ル

左通尉

一元旦其外至按日柄ハマ及此ハ此ニ此ニ三日
の福を蒙目小くも是支支々々なる都合次第で
相相成ル

使臣

一左より明後廿六日乗上マ仕ルを毎々此支度
等の内子数相掛ケ出入ル旨同登九ツ半時以

海舟書屋

よりマ居出ル

左通尉

一左支度等の参を粗末の事小も有る更小心配ニ
ハ及ハ不中ル但登後より参られル旨都合宜
度備ニ有るなり其通マても此方おめてハ是
支支々々

使臣

一明後日九ツ半時に居出マ今日本最早引
取マ中ル

左通尉

一茶の用意出来ぬ由に付子向ハ有るを
中身交ふ為一旦休息の上より退散す可なり
使臣

一折角の由沙汰に由るは茶頂戴仕るべく
双方退座

寅正月三日辰出の書翰和解

使臣ホウテイヤテイ子夏岡井肥前守極川路
左衛門尉極江由禮由挨拶中上両極及ひ示
書草稿を翻譯昨日辰出のを何卒 由老中の

海舟書屋

由属に成下る振仕度有る

新將次官

ホスレエト人

曆数千八百五十四年正月

魯西亜十九日
和蘭 三十一日

嘉永七年寅正月三日

魯西亜熱國中獨立支配する酋長たる帝と日本
國將軍たるの帝と向後和平真信此兩帝國之
間に決結せんと欲して兩國間の境界及び
此都合等々要領書に因て極んと決定仕る

為し魯西亞國帝此度アミエタントゲ子ラー
 ル、フイセアトミラールエンリツトル名 爵ホラ
 ナイヤテイ子人をして此重き任し處て今
 を下しヤル日本帝ニも則同井肥米島振川路
 左門尉極又其任あるの領此双方の重き任
 して兩國帝相互に有益を勸考し其重き任の
 任ある要を以左より案を交す

才一 向後常に魯西亞國中獨立支配し酋長
 ある帝と日本國帝及び其信下とも和平に
 交す有る

兩國に保領し終て魯西亞及び日本此臣下
 たる輩何人も人倫に道ハ勿論双方各所領
 の他より犯し強きの倚頼及び拒防し不當
 なる

才二 不和の原因引おさるの防ぎ為今般魯西
 亞と日本との間の境界を定む事ニハ日本
 領と境界も北より終てエトロフ島アニリ
 港ニ至サカリーンと南端カラフトと定り
 ハ此會所の島に終て魯西亞領日本領の境
 界節を牽延引おく其場不土地して双方交

心相互に絶つる事、及び尚此取極む事相
違ふを定むるエトロフの如く當り想ふ
島及びサカリ、島南端より外に於て魯西
亜領に属す

才三 日本政府より魯西亜軍に商収する二港は同
つあり此二港一も日本大坂今一も蝦夷箱
館よりあり是等より収むる此米其取らる
る入税を却て居住其患難海害を凌ぐ後を
加へ且新し其用具を整へ其他必用する事を
条に適合し以て日本人定の價を以て初定仕

或る魯西亜の品物を以て交易仕事を海に
中へ

双方決定の事は依て格別ニ高賣取極む事
定済し、必高賣する為にも二港に相用は
る中三港の二港と長崎と港の外に魯西
亜取余する数は或る暴風或る取破或る
食用する品等不自由の時宜しむる長崎格
別其取極む事を請ふ時、外に必其近隣
の港に入込は極むる仕る数取極むる
此新の如き患難の時、八日お場不くる

司として其取人々船中強取の者ハ支々
此技師ハ世話ツ方々ハ食用及ハ其他の品
々相求ル時且取所彼の時ハ至テハ支々價
を以テ相拂其ハ因テ港ニテ東を糸一ツ中
ハ時又其協不ニ魯西亞國日本國日本國双
方の漂流民連城ハ板ツ方々ハ

才四 右二港の不ハ知ルハ商銀而建設合宜
場不ハ居方々ハ魯西亞臣下未々ハ者
近ハ住居主藏其他家屋法品物入也不等取
建ツ中ハ右商銀中ツテ魯西亞人其親族ハ

共ハ其國風法度之定を立今日を送ル事を當
ニ其宗門を以テ恙ハく道を納ツ中ハ此其日
事政府ツテ何々ハ障ハ不相成ハ其所未々ハ
取々ハ常々其商銀ハ相互ニ勝ハ次方相交
ツ中ハ

才五 双方決定の事ニ付納得々上右中互通ハ
港ツテ商賣相違ハ事ニ付商法向取極々ハ
尚要致相極々ハツ中ハ

魯西亞政府ツテ其臣下未々送命を下ハ自
今以後ハ國法ニ背商賣及ハ格別ツ取ハ所

片高法採堅く仕る安板嚴禁を主たる此法
 則より第一逆の者魯西亞隨屬の国より有る
 時ハ日本ハ政府ニ其品物ハ市上ケル
 定を立置かれ其法を犯ル者魯西亞國ハ
 戻ニ相成ル最右一件魯西亞商館ハ在作
 知ツル下勿論其罪人ハ國法通り罰計
 中ハ

才六 日本國トテ初ハ魯西亞隨屬の者ハ板
 此規定有る中於而も全二港何れも魯西
 亜政府よりコンシユル
 官 名 員 出 立 此 者 出 役

海舟書屋

方々ハ法交等都而つ仕ル日本人より右コ
 ンシユルを其身分相急ニ取扱意を
 振つ有るハ其港より亦及ハ日本政府其
 他より人物も右コンシユルとるハ急對工
 合を双方相互より同振る格を以て交つ仕
 則右コンシユルを魯西亞國主より目代ニ
 有るハコンシユルを万一病氣又も諸合不
 中ハ時を新ニ官中自ら進み同を魯西亞商
 館より役人より元老より者其代を勤メ則ち計
 振る定等其任よりありつ中ハ

叶々此等為欲る要ふべし今書付を取替へ
板つ波但書付をとも双方重任る各各記し此
内二項の要る所を常々透宵至る板つ
仕へ

曆教千八百五十四年正月
魯西丑十八日
和蘭三十日

嘉永七年寅正月二日

フレガット船パルラス
号取長崎

日本全權欽差頭賣大臣筒井肥前守板川路

左衛門尉極々奉る

海舟書屋

俄羅斯政府の預ひ已に明告したれハ今も及
て俄羅斯全權大臣と日本全權大臣と章紙を
相共し交付するの外他は遠く所か一是に副
へる和約章程ハ是より後兩國和好を締ひ
後相共し國益からんとを議定せむと欲る
るの事類を以て記載するのあり故に和約
章程の箇條を以て下條を定む

才一條

兩帝國の経界を議定し相共し不領を侵奪し
ることあるべし

第二條

俄羅斯日本兩國此和約を固ふして不睦の對
面ありらん。其會晤ハ何處の所にてか
收へきや否を定む。此の時ハ指諭し給ひ
この港口よりありされハ他の地より來泊すること
ありき。

但和約章程に載る事ハ此例にあり。

第三條

西帝國交易の事ハ此の預め章程を定め
る國より歲月を期し別額の交易章程を決議

して後交易を始む。此を以て法に居れる商
賈を防ぎ且これに依て生れる所の不法なく
日本港を安らう。ハハ俄羅斯全權大臣
の殊に忽せざる所あり。

第四條

上件の目的に依て和約章程の内に種々の法
律を載せたり。即兩國臣民の待遇且交易其他
の法則に居るものをも罪を犯す不睦の如きは
也。

第五條

和約章程に定めたる正理と特旨の外に日本
國より他國に許したる寛典あらは俄羅斯
臣民にも又是を許さるべし此志願ハ日本
全權大臣も其適好ある事を嘉しとて給ふ
るべし殊にハ其政府にて俄羅斯國と隣國の
好まざるを以て撰取りたまふんと欲するよ
し大臣諸君自ら云ひるべし且俄羅斯國と日
本と平等ありん事を願ふ
日本に全權欽差述べ副ふる所の和約章程に
署しなり俄羅斯政府に於て其願ひの達する

事を欲し且諸君も日本と俄羅斯と和約を
締ひ懇切に交好せんことを欲し其の意も自
ら明らかりん若し速に境界を定め俄羅斯の
ぬき二港を開くを遅延しなり日本政府に騷
擾を生し大なる困難にも及ぶたまふべし
薩哈連^{ラフカ}島の境界ハ春内とある國より官
負を送りて容易に之を定むべし此事若し三
五年をさる時ハ俄羅斯人日本に地を蟹殖し
るに由るを以て重切ある禍害を生じべし且
全權欽差謂らく彼和約章程の諸ヶ條を決定

二四
一、うふ迄ハエトロフ島ハ日本不願ニあり
と思ひたまふへ一社々條を一ニ拒て密ニ完
成して寛典を更との告を將るまてハ俄羅斯
全權大臣日知を去るにあつて俄に俄國も日本
港をより向ふへ一社々中より俄羅斯宰相ガ
ラーフ爵子スセロ一テ又告へる書翰の
中ニ依れハ當時の形勢とありてハ英國の交
易好皆舊律ニ拘泥するにあつてハ英國の交
易を知りてむねハ社一事をなすうふと豈
ゆるんや今一言をきくは附を

交易を宰相への返翰ニ記せる年月よりハ早
く同きるハんと是欽差大臣の預めあり
俄羅斯より早く他國ニ交易の章程をあつ給
ふありハ此隣れる大國ニ告るは取されハ
色をぬくうへへ一社々又大臣の請ふ所
あり

カビテインロイテナント官ボスレート譯

一千八百五十四年正月十八日長崎に於て

寅正月四日中村為弥永持亭次郎持系俊茂に相

魯西垂使臣の論書

貴國執政より我國宛中の書翰は此地の境
 界を定め西國の和親を結ぶ交易を通せん事
 を申越されしに此後治定の挨拶に及びぬき
 事ハ既に運輸中より述べる所にて分曉ありた
 とへ此上宛中の直に申立らるゝよりて又
 く宛中不承の事評議これあると申聊其意を
 動を承成りしとされとも進々使節より申
 立らるゝ語も更に各諸事相國且も留意に

海舟書屋

申さるゝ事故あるを面皮を互相返答より
 て即今境を定むる事を成しといへとも
 先地不見分のとれををし西國は乃ハへし和
 親交易に及ん

祖宗に嚴禁して世々確守すべき要ありと
 古今の時世變遷し古例にてハ今事を律し
 一故に其當否を評論あれとも未だ決定し議し
 ぬらば方今我君主位を治りせられ海内百奉
 の新政多端ありて其勝を評議し及へし暇か
 一の、る大事ハ必京師に奉回し諸大名法改

人により達群議の上取極る事返翰中より述ぶ
次第にて且布政の始に

祖宗の法を大切と守るべき事を論をきいて
永世に重典とする事おれハ此時に當りて旧
法を改る事を主眼とハあつて去れり
し中屆き事有熟考あるへし抑往來貴國に使
臣レサノツト此地に是り中乞要ありし時我
は終て素より意あけしハ速に辭して其等の
評議より及ハさるべき今次中誠る要り意あ
くんと其時の如く辭をへき処あるを論定る

の時を待へしといふハ分量の意味ある事
しそ貴意を後とあつされハ使臣は終て國令
をまつてむしハあつて三五年の時月を
費さんこれことハ亦文中述ぶ通に日教國の
朝通くせん事を蒙りて然念していふ所か
れハ嗣君徳業に典禮もこと一年立後と云
り御素願を以たりんハ使臣の深切を切に
ふりためし急き面調に及ふへけれハ日教
國の朝通き事もあるん。又外國の漂民我國
地に至らん時邊を救ふて厚く救恤を以ハ

二五
このハ我國法として殘剩の至處有へき小あ
ら民おくり返され一國民等ハ尊くも當して
奉政おく其いとおえをせり貴國の新海上
にて漂流し及び我國地より來りて其求あらん
時破後修理の事々其次其山も各と故條々約
し細しとりへとも奉政おく人ハ薪水食料
を江戸通海を除く外其求も急をへし其價
をせされん事々

祖宗の法に據る所あれハ方今養ひ及細く恭
文件との議論定む時より至りて改定へき也

エトロフカラフト二島の事一旦やさる、昔
あれともエトロフと元來我國不属の地たる
事既に分明あり因て彼是の議論に及ハたカ
ラフトは各其不有を以て國境を確定せし
し先達ヤニワ港に重要の守兵を外寇の來り
指らん事を憂るゝゆへして我地を侵し奪ハ
んとするよしあり其境界定むの時より建し
引拂ふへし右邊境面調としてまゐる我國の
若貴國の守兵に出遇ふ事あるも聊害意を被
さず和平を以て待へしとの事彼守兵に示さ

予、書付し是をあらハし其余面晤の際使臣
 の実意悉く早ぬ斯く原意中如きと明白あり
 しかるくハ其等所存より貴國に信義をもち
 大國として遠ニハ使臣別派あり人物は是更
 るよりて偽りを以て人を欺く事ハ決りあ
 りらんとその事を具し宛中より立力を乞へて
 永く貴國をして安穩ありしを人事を反計ハ
 んとをりるのあり

寅正月四日宛中對話

海舟書屋

使臣

一 今般は滬より書取昨日漢文を譯し滬ニ付蘭
 語を譯と照合詳見いさしハ要魯西亞を外國
 くと遠ハ格別より取扱の中相違なき事ハ
 式

左の附

一 貴國と境を接しハ隣國の事故外國くと遠ハ
 別派より取扱ニ相違なきハ

使臣

一 疑有る事ハ他より上ハ唐紅毛を別派より其余

之外國より通信通商を乞ひ此許容相成るを
魯西亜に由るは沙汰有るに依りて之を

左の如し

一通信通商を乞ふ外國へ此許有るに依りて之を魯西
亜へ此許有るに依りて之を勿論に之を

使臣

一此後若く通商此許に相成るに月百枚之を
外國人へ此許有るに依りて之を魯西亜に由りて
此許有るに依りて之を勿論に之を

左の如し

海舟書屋

一若通商此を相成るに若外國人に此許に依りて之を
魯西亜に此許有るに依りて之を又子細有るに依りて之を

使臣

一只今申立るに之を若く之を書面を以て申上るに
此若く書面を以て之を此許に依りて之を

左の如し

一相心得るに之を又使臣申上るに之を不審に之を
此其譯を政府の爲めに相分るに之を此許に依りて之を
此之ハ此を相親に之を此許に依りて之を相成るに之を
之を外國に之を此許に依りて之を此許に依りて之を

二九〇

一、不審此意。二、此法在私心得而為之。ハ隣國發
 二、此國之行為を忠告中絶之。發故外國之
 の在萬一乱妨狼藉之發有之。此法をいつく迄
 亦此加増以多し。此心法ニ此意ハ此法在
 府之知能之ハ此國之此法被之。此法をハ
 之。此法を此法を此法を此法を此法を此法を

海舟書屋

一今一事例度以て遊に中立を以て我國を私く驅
風し遠く至る金貨貴賤何ぞ濫はる入港の多し
是より救却を更なる良法代令不相成ふ而して不
叶事二付何れに濫はるる度極有る其場不
書付を差出處支へ拂方致しんべし甚便利
三付右場不兼重なり

左場附

一其場不即今差極めしむ是を爲る書さし重

進の議論相定ぬ上拂方いしんべし此も差支有

左衛門尉

之るを以

使臣

一其度々拂方不仕進之相嵩之由を商惑り

しん

左海尉

一此進之振合を以相考の故を招判し奉り有る

召致其國より我國地へ来り故即を乞ひ是

迄終る三度にも不之に絶る時ハ亦未も同振

二之有るに必心配に及るを以

使臣

海舟書屋

一進來を以てふも之及に掛念の多しを以て有

る

左海尉

一少く多くに連外國に遠く貴國を隣國に以

て其相救ふハ當に事なる

使臣

一右代料等之を通商に免るは論定の上と申し

而も勝り進みしに以ては亂の毒に付通商に免

るも之に據て是より沙汰相預は勿論右通商

しるも薪水食料并湊に取同之を以て是余等事

○西夷急公為何多不之工吏亦下度公

左海尉

一心得公右之候政府也中主

使長

一今日之折角也入來此下公家故也入公家ハ石

中上管二公以右亦之無金其車二付中上公

多二公此上之與也政府也中代也作立何公二

也預意也立此下公板相預公

左海尉

一得之也中主公右左板也中主公

海舟書屋

使長

一思也方之也而會厚也而板也或中難有孫公右

等之類也勿論沛國也舊法也改也或公板也

中上公板也細政府也中主公右必也法也改相

或公板二相預公多二也產公

正月六日左之書而漢字國字相通二相認持系相

海

後來我邦若有開市之日須以魯西亞先乎列國

後來我邦若有與列國互市之日魯西亞交界之

故准其商利諸事同列國

此末我邦終日若通商者許之也相成以貴國
之以此

此末我邦終日外國之通商りていふ時と
いふ貴國と土壤相接する國也へ交易偏
其外と外國因はるる心は

同月七日魯西亞使より左之書付るなり

貴國經二百年。躲避通交外國之間。被教化之域

海舟書屋

皆經大變。兩面情勢即有異。且貴國現在之情

勢有可險之處。是為所應解說者也。蓋誠願欲者。

即俾貴國至盛勢。本國亦有益之是也。三四十

年以前。貴國若有永遠躲避通外夷之意。猶可

矣。蓋貴國離衆有大學文之國。相極遠。圍住

貴國之海常狂風大作。貴國之港口有一尹不

得入之。有一尹不得知之所以外國之人前時因

不受枉然費力費時。而非因有禁止來此之例。希

見貴國之疆界也。今者有大異也。各學文既通

達。各技藝既盛長。飄海通商之率遂已廣矣。火船

己行水程遂減多矣。所以現時除南北極因凌不可至之域外。天下無未得知之域。未得見之域矣。未時貴國亦不得無理會外國船至。貴國港口年復一年來多。過近海邊之船尤多矣。此皆非無緣無故而育之。然不得已而當如此矣。蓋貴國以東西南北之方皆一開市通商之事。年復一年既盛長。各國大小船比前時遂百倍多。縱橫渡海至不得不到。貴國順路之港口也。由此貴國猶可自揣摩到底可否永遠避外國之交而拘待外人之舊例耶。數年以前荷蘭陀國所遞之諫

文亦非指是乎。今即有派船者到。貴國來日以為常。皆要勸諫。貴國相和相交。允准本船臨時不礙到貴國港口以備其所需矣。自然以賠貴國所出之物本船遂理當進其所帶之貨以為兩面之利益。如此則不得已而當出通商交易之事。各域所索者是也。本大臣盼望貴國既仔細詳究本國所題之事及此所述之理。便不再延緩即起通外國相於啓核理之交。亦不再援引舊所謂不可犯之例矣。蓋所謂例者於理義常有異也。譬如渡海遭難之人。各處不得不動人之悲感。不得

不見人之體恤。亦不得不濟于人以歸其本地。是為正理也。至于貴國非然矣。不久有貴國六人北海遭風至本國北海島。收之養之。本大君主施恩命本國船隨帶之解至貴國港口。去年遂解至港口。該地方官不收之。加嚇嚇使船立即遠之。貴國遭難之人求准約見死于本地。船主乞之。放其便到海邊。或死應待之處。豈有此理耶。再者外國船一到貴國港口。即亦據舊例除不准其人登岸外。用各域所為恠異各項傷心之術。自約束壓欺人之若起以至驅逐船加禁止

再來耳。又豈有此理耶。知理之國非如此矣。遭風之船一到其港口。立即設法以整其傷以救助其人。且厚待而禮之。以為禮其國矣。是為正理也。外船未多者每國以為其本榮。相換土產各貨物者每國以為人民富貴之首法。無時相通以絕不相和之緣。各國駐公使以為交友之據。是為各國相和睦安寧之正法也。由此觀之貴國之例校正理有不管之處可見矣。幸風聞有一條例。貴國業已推辭之前時或因遭風不得已而到貴國海邊之外人遵照無仁之舊例。遂入監至死不放之。

近年改之准其回籍。如此則別條例亦可改。即立新條以符合當日物情矣。蓋貴國所謂旧例者亦不甚久見世也。且貴國既廢外國之交何以得之耶。得否見安寧在內是所不知之也。惟杜通外之術以為杜險危自外來之法。未必不悞矣。獨不欲通外者何足為理以廢外人之討索耶。何預早未得料度來日外人所討之事復起興而且加兵器得堅實必耶。既揣摩之以何備不預耶。遠外世內勢遂失其威矣。一視貴國港口所以為防阻者。有疑之勢便可見矣。外少數之海師一至。

貴國之海防砲台皆立即陷必矣。貴國兵船皆不足擋外國操熟之數船。雖萬艘皆易可絕滅之。貴國海島亦皆可至于不得相通矣。本大臣所誠願者乃使貴國再不拘泥通外國。而待外人再不加疑惑傷心彈壓之敵。如此則不到至似可嫌之勢也。本大臣隨應通知貴國。若無延緩而應允外人合理之討索。除絕後患外可至於盛勢。依其地域之廣大。依其戶口之數。依其富貴。及依其民之善性當至之地位。是也。

寅三月五日 何勢与相酒

筒井肥前守
川治左衛門尉
松平十郎公祐

評定所一殿
海防掛り江
浦賀より
江川右衛門尉

是

去年長崎表に渡来し一魯西亜使臣之来を思ふ
ふといふに清國上海の途より滞留して有る
左より萬冬長崎より對話を一日本諸大臣彼

海舟書屋

地より江戸に歸府の上政府に申すに
と右使臣は中達度有るを以て要する事知る
通 祖宗に禁むる外國に使臣を出し其相成
兼且ハ大敵を至る事不致己其後歩むる重
魯西亜人而含るる長崎細右に攻めつ及渡進
魯西亜使臣之来ハ萬く中通方之要要利加
人の示談に及ぶ事

右に通校大學院に相達するに其意の事

寅三月

去年長崎表に酒是之ー魯西亜使長く船倘
 國上海の迄拓又係泊ししー乃ち之を左に
 旧冬長崎にて對話せし日本誌之條波地より
 江戸に瑞府の上政府へ申上り品物有る右使
 長に申達附書も有るに要する兼知て通
 祖宗に檣に外國に使長長出ん等相戒兼且
 大船も至る等不取已其後より亦之を言ひ魯
 西亜人面會に長要細右に次第に及浪述名寫
 く魯西亜人の中通に板面秋和蘭の取切帆を
 長魯西亜使長に取に申通方々甲比丹に示

海舟書屋

渡つて及ん奉

右に通長崎より相達に与て其意に奉

魯西亜船再渡に長面計方々

以同表相伺に書付

岡井肥前守

川路左衛門尉

進く浦賀より中上り大島沖に相見に異
 國新嘉西亜取に由に相伺殊に先達に長崎表
 出帆に碇居るに書面を額に申由彼に預言也

三九
史記云吾相伺公之先再 中國地之廣遠之
上之中心亦有之魯西而北之相遠亦有之
或云一併波之魚接之次方之進之中心通之
以通簡之口領意之押之而之公之波
より中三の條件之口社長北地見分る者之
是の計之而其條之第八條之進之口河之
領之中心之領意之公之波之今般アメリカ
之口之口領意之公之波之今般アメリカ
或云右之魯西而北之相遠之口領意之公之波
件之口社長容易之アメリカ之口領意之公之波

公之口之口領意之公之波之今般アメリカ
十分之口之口領意之公之波之今般アメリカ
也連之魚接之口之口領意之公之波之今般アメリカ
其不容易之時之口領意之公之波之今般アメリカ
以之口領意之公之波之今般アメリカ
或云一併波之魚接之次方之進之中心通之
基之口之口領意之公之波之今般アメリカ
或云一併波之魚接之次方之進之中心通之
以之口領意之公之波之今般アメリカ
一魚接之口之口領意之公之波之今般アメリカ

リカ人ニ魯西亜人と都合面計ハ多ク是ノ相
案居主ハ乃アマリカ人ニテ仕向一際宜ム
ニ附込ム由社上魯西亜人及アマリカ人ニ密
ニ申通種々不法ニ取計謀させ魯西亜人ニ手
を下さんとして種々作ニ仕成十分利を貪ム
此ノ奸計ニ方々を唯今より注意念仕ル所
候其防方亦至ルニ付先ツ米書ヲ見込ニ而
押付ル振込度ヒのと米書ハ取込度ヒ是
上ニ建シ出張ニ仕テ勿論ニ此ノ米書
之類ニ取付キ是ハ至ニ付種々取付キ
海舟書屋

振ニ而モ如何ニハ此後注進ニ據振ニ分先達
ニ便取振ニ相違至ルハ先方御尉支配向
之由のあ三人度を一ト通意對テ上社振込
より申付ル度有テ彼取テ渡来を相待候
進付振込も出張し一ト及意接旨申論
此ニ而居候ハ方事御相違ニ仕テ是
ニ付思召モ至ル度ハ此勘定組内中村為
多ハ先達而長崎表ニおろく彼取ハ長
いたしハ多ク有テ奉馴ル由ニ付此
為人是通詞森山某ノ御石連正居是ハ振

仕武以沙清之攻武二魯內意之至中滿重以批
上仁孝教以且通詞策之即至八若文之次武注
進次武急達江戶表以昭告武威下以振仁厚在
茲以依之先以內意奉伺以以上

寅二月

筒井肥前守川路左衛門尉より魯西亞永再啓
之長石計方之至之計以內意奉伺以書面武威
以中一覽勅命仕以要右為人以氣血以書面在
以正修治以額之有之以上之如何故其心力在

海舟書屋

受一應接仕奉禮二退忱為請以要之乃有之批
而之被以諭方之大意中上之額格り懇切之至
以即之相同以故左方而弊害も有之召我新
水食料永修渡等石炭炭之至武終清國地渡是
之所同以是也武至墨利加以以是免相成以
上之魯西亞以以是免相成以之即之計是亦
中互以通以許容相成以方之奉待以且氣血魯
西亞之別後之計而故相成以而中同互以次方
も有之之計而之至墨利加以以是免一相成
以之魯西亞以以是免一之計而之別後

康正之公の如き連も有まてめ方出来候はる
上あり候も願計とて願むべき次第は有る魯西
亞よりハ既ニ文化府長崎表に使臣居越願意
申立候處は評客を召し候に右舊例に今
般も同様に渡来し候に願ふ事と云ふより
亞墨利加州とも異同あり候を勿論と云ふ
有る候れども一應此を察し候に候はる
而も兼伏仕る事と有彼願意とて此を免る事
件とて治定に成候に候に候に長崎表意
接し候に返翰し候意を仰立彼より申立候事

海舟書屋

件とて此は北地見分る者此を以て計と云其
時と進め候に沙汰し候との趣を以て論議
要間も無き渡来し候に連一應に對話も
て願ふ事件一束とて速に此を免し相成
り候點に貴人共愈其に厚情に有るり如何
振る願意申立候も願計とて身一つ先恭文
康に此を評する事と有候に其の餘の件も
容易に因届不相成候に候に接し候に
考懸願に餘り次第あり候に又其に相
評議を召し候に上と云ふ是に角に居る事

海舟書屋

三月

大同村

以同封

寅三月廿日
年
糖
弓
直
渡

筒井肥前守
川治左衛門

丁
相
達
飯

書而論振之俗見通之任正威公之漢之興
大故之由而律樞要之端石二符類相成候何振之
相以長濟英下田箱鼓之新正卷以美之評容之

正成以薪水食料其外欠乏之品相渡代わらる
正益之玩物而已更右の如くは回内之疲弊に
相成るる謝物として令限更取つ中漂氏極恤
和傾後等免北地境界之憂と宮子見分る者
如立いとして来卯年と治定より取極相成の旨
し月通信通高等ハ其上ニ白つ及討談告中流
以極つ正成の其外支配向く者若くは長を伺
之通つ正心竭の奉

下九

長崎藩下田宿領に和を告ぐ長薪水食料

海舟書屋

其外欠乏品相渡代わらるハ當否ニ不拘
謝物として正成の如く更右つ中との要宜
極く是の如く三ヶ所より渡り強ニ意向が
く時あく是等の如く正成の品々大違の
入用。つ方々正成代わ當否ニ不拘謝
物正成の如く更右の如く中流の如く是より
貪利之夷人其時計其外取用之玩物の之
差出淨圓四丈違疲弊もつ及即一月一
向ニ謝物として更右の如く令限之極意
以方つ正成の奉

本國内之疲弊とも相成ひる定價を極む
 謝物に受取られぬ方と申すは勿論令根も調
 訟場同様に通用する定額に不拘斤量を以相
 當の價受取つた事あるは評議仁に趣書面
 之通に在る則ち下之書面を評定不一座に相
 比し此後中止以上

四月

文目付

比目付

海防掛

大目付

海舟書屋

比目付

寅九月

魯西亞國帝のアドミラル
 フォーセアドミラル
 千人 大日本國の執政と此一輪を呈
 我長崎に到りて後日米政府の貴官と若
 々二ヶ月を経りて二ヶ港に赴くべしとあり
 ると魯西亞國と嘆咭喇佛良案國との不和あ
 りしより依り我國の海濱を去り難きと及べり

爰を以て我貴官よりハカドマリ村より以て
 飯向を要し奉を告り我此主意を最度告るを
 將にして日本に役人の郵便島より遠路の
 苦勞を添ふさるを氣の毒の至あり
 日本海濱を退く至る本柄ありしは最早奉
 果て箱館より來り此一書を江戸より送りフレガ
 フト船より水食料を貯へんとは但日本貴官の
 證書より依り魯西亞船の要用を達せさる奉
 何るまゝ

日本政府の貴官と協定の渡列を遂ん。為此

海舟書屋

地より直板大坂より船く至る今次船く至る港
 を記すは我彼地より船く最貴官彼地より船く其
 港より通詞相魚の負致をさく日本政府の令
 江戸より於て協定の渡列ありしとありハ其
 貴大坂より告示あり奉を願ふ能らハ速に江
 戸港より來るへ

我執政より常より敬恭を乞ふ

曆教千八百五十四年正月十日
 和蘭 廿一日 箱館港より於て

フーキヤン 人
 名

同年十月朔日作書與相潛

魯西亞人

意接之面之也

此別紙詳見任公此地近海之異國新樂入公之
二角委細中上公額內兼知此下此表之異國魚
接之地之無之何事也余之樂公之長壽下田而
港之內相就中中音中論何此之也早之退航
此之公此町年此中中酒之有計名且市中動搖
不致此有德之方也中中酒之此此作下其
意則町年此中中酒之此右之額眼坡溪治之也

海舟書屋

此作達意公候為心得此作下兼知任公以上

九月廿六日

土屋康女正

阿部作書與

牧野作書與

松本和泉與

松本和賀與

久世文和與

內房純作與

九月廿九日之次虎脚之也

土屋家女正の巻

箱綴：おろく魯西亜船より日本政府にて
出告の是る由に書翰暇廿八日お告いふ
る漢文を授け文字を分る式通ふ和解の
寫進の所より由に達しお告いふ又右
書翰宛中披見：月詠下田港に相成る由
論書蘭文添進のる魯西亜人の相成る由
に右計の右：月詠と魯西亜船の速し其地退
帆の波のよる由に月詠の是る由に右
詞の是る由に右に其表其外に其の由

海舟書屋

内自今見込に中綴る紙の次頁：其通
右計いつ迄にも一日も早く其地退帆の
紙の骨のつて右計の示す所より右に
酒の紙のよる由に以上

九月廿九日

連名

土屋家女正の巻

大坂表：酒進の魯西亜人の論書

箱綴表：おろく魯西亜船の授け文字を漢文
書翰江戸に到る波の宛中披見：及由に大坂

三

十月四日 次飛脚 去

解
體
書

其地安治川
沖江潑夏魯
西垂弘遠帆
始發公西

海舟書屋

[illegible]

接之砌萬之波列之
右之額所事以之
以上

十月四日

連名

土屋家女正振

去月十八日當地安治川沖之
市下知之通下田流之
辰中別機之安治川運帆仕通海帆已同未中別
紀漢沖合之帆向之振子之

海舟書屋

以受好長大風高波之
見屬兼之知在紀別加田浦迄之
昔中同之志是切取是出直之
上猶又下中上之知在光武院中上之

寅十月

信之文信濃子

川村對馬子

開國起原卷五

海舟書屋

6/11

